

霞

—2015年度春季展示室だより—

土浦市立博物館

平成27年5月12日発行(通巻第30号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(30) 古写真「戦後の西櫓と桜まつり」



黒く塗られた^{にしやぐら}西櫓を背景に、桜まつりの舞台が生まれ、たくさんの人々が集っています。西櫓は昭和24(1949)年のキティ台風で大きく破損し、後年に解体されました。桜まつりは昭和25年に第1回目が開催されています。西櫓が黒いのは、戦争中、白壁造りの建築物が、空襲の標的とならないよう黒く塗られたことの名残でしょう。

【情報ライブラリー検索キーワード「亀城公園」「西櫓」】

目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(30)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【館長講座及び各展示と催し物等】
- 人面墨書土器(古代)・・・2
- 東城寺経塚(中世)・・・3
- 奉納百首(近世)・・・4
- 墨塗りされた楽譜(近代)・・・5
- 市史編さんだより・・・6
- 地域と博物館・・・7
- 霞短信「那智勝浦町での色川姓サミットに参加して」・・・8
- コラム(30)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★

5月17日(日)・6月21日(日) 両日とも午後2時~(1時間30分程度)

テーマ:「古墳時代箱式石棺の世界—東アジアから霞ヶ浦沿岸へ—」 会場:博物館視聴覚ホール

★★はたおり体験★★ 6/20・6/27・7/4・7/11・7/18・7/25(いずれも土曜日)

さき織り(裂いた古布をよこ糸に使う織り方)を体験します。 ※要予約です。詳細はお問い合わせください。

★★土浦ミュージアムセミナー2015★★ 土浦地域の歴史について、学芸員が研究成果をお話します。

6月14日(日)「霞ヶ浦沿岸の縄文時代後晩期遺跡について」 亀井翼

6月21日(日)「武者塚古墳が語る古墳時代地域史」 塩谷修

6月28日(日)「法雲寺出土瓦からみた室町時代の関東地方」 比毛君男

7月5日(日)「祭りとお囃子—県指定文化財「田宮ばやし」の歴史と伝統」 萩谷良太

7月12日(日)「新治地区の石仏とその周辺」 関口満

★★拓本同好会作品展★★ 6月24日(水)~7月18日(土)

★無料開館のお知らせ★ 5月17日(日) ※国際博物館の日(5月18日)が月曜日のため17日が無料です

★今年度の春季展示は5月12日(火)~6月28日(日)までです ※休館日は毎週月曜日です



博物館マスコット
亀城かめくん

時間:各回午前10時~11時30分まで
 会場:考古資料館 体験学習室
 受講料:各回50円(資料代)
 定員:各回50人(当日受付)
 お問い合わせ:上高津貝塚ふるさと歴史の広場
 (029-826-7111)

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

人面墨書土器

みやこ

— 都と地方を結ぶ祈りの道具

市内遺跡の出土品の中には、古代の人々が用いた祈りの道具がいくつか見られます。その一つに、市内で唯一の人面墨書土器（写真）があり、縦横5cmほどの小さな土器片ながら、当時の律令社会における都と地方の関係や、地域社会の様子を考えるうえで非常に興味深い出土品といえます。

この人面墨書土器は、市内東部に所在した長峯遺跡の発掘調査で出土したものです。同遺跡は平安時代の9世紀中頃から終わりまで営まれた集落跡です。この土器は9世紀中頃の竪穴住居跡から出土したもので、在地の煮炊き用の甕形土器に人面を描くことで、祈りの土器に転用したものです。使用された後、竪穴住居跡に廃棄され小片になってしまったようです。この土器をよく観察すると、墨によって眉毛とまぶたが描かれ、丸い瞳がみられます。眉間にはしわのような表現がぼんやり認められます。

この土器片をもとに当初の全体像を想定すると、参考図として示した石岡市内の北の谷遺跡出土例のような人面墨書土器であったと考えられます。やはり9世紀中頃の在地の甕形土器が転用されており、人面表現のわきには墨書で「馬飼部真麻呂」と祈りの主催者と思しき名前が読み取れます。

茨城県内における人面墨書土器は7遺跡で10点ほどが出土していますが、その多くは常陸国の役所がおかれた国府域で見られ、その他にも郡の役所がおかれた郡衙の周辺域からも目立って出土しています。このような傾向は県内のみならず、古代東海道沿いの他の国々などでもみられる特徴といえます。

もともとこの人面墨書土器は、8世紀中頃以降の平城京や、長岡京が営まれた8世紀末頃の畿内地域で盛んに用いられました。専用の土器が用いられることが多く、川や大路の側溝などの水に関わる場所から多く出土しています。この土器は、当時の都やその周辺に暮らす人々を震撼させた疫病などの災いの祓いを目的として用いられ、川に流されたものという解釈がなされています。

都と県内出土の人面墨書土器では、その出土状況や土器の特徴において相違がみられ、都での祈りの習俗がそのままのかたちで地方に波及したものではないようです。

（関口 満）



長峯遺跡出土の人面墨書土器

（上高津貝塚ふるさと歴史の広場所蔵）



（参考）北の谷遺跡出土の人面墨書土器

5/30（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 長峯遺跡出土墨書器（上高津貝塚ふるさと歴史の広場所蔵）
- 八幡脇遺跡出土灰釉陶器（上高津貝塚ふるさと歴史の広場所蔵）



東城寺経塚

—経筒が語る延暦寺との関わり

土浦市北部にある東城寺は、創建が平安時代初期までさかのぼる古刹こまつです。古代の山林寺院として出発した東城寺が、その後どのような歴史を刻んできたのか——それをわずかに伝えるのが東城寺の経塚です。

経塚とは、経典を主体に埋納した遺跡のことです。主に紙に書かれた経典を金属製の経筒きょうづつに納め、小さな石室を築いて鏡などととも埋められました。経塚が営まれるのは寺社の境内けいだいやその近傍が多く、高所や見晴らしの良い所が選ばれる傾向にあります。東城寺経塚も例外ではなく、現在の境内地の裏からわずかに登った、南に桜川流域の低地をのぞむ斜面地に造られています。

経塚の発見は、明治時代にさかのぼります。12基の経塚が確認され、銅製の経筒をはじめ和鏡、銅製花瓶、経典などの出土品が現在東京国立博物館に収蔵されています。経筒は保安3（1122）年と天治元（1124）年の銘があるものが伝わっています。当館が展示する複製品の経筒は保安3年銘のもので、「願主聖人僧明覚、大壇越平朝臣致幹たいだんおつ たいらのあそんむねもと」の名が見えます。2年後の天治元年銘の経筒には同じ平致幹の名とともに、「延暦寺沙門経暹」とあります。この銘文から、平安時代後期の東城寺は、常陸平氏の外護げごのもと延暦寺僧と関係をもっていたことがわかります。なぜ、遠く離れた比叡山延暦寺の僧侶の名が東城寺経塚から見つかるのでしょうか。

寺伝によれば、東城寺は延暦15（796）年に最仙さいせんによって開かれたとされています。最仙開基とされる寺は、西蓮寺さいれんじ（行方市）をはじめ天台宗の寺院が多く、最仙は初期の天台教団と関係をもった僧として伝えられています。また最仙から寺を受け継いだ僧は、広智とされています。広智は、初期天台教団と深く関わりながら下野国の大慈寺だいじじを拠点に活動した僧です。鎌倉時代に造られた広智上人坐像こうちしやうにんざざうも東城寺に伝わっています。

最仙や広智と東城寺との関わりは、後にまとめられた寺伝などに書かれているもので、平安時代の東城寺と天台宗との具体的な関係は必ずしも明確ではありません。しかし経筒の銘文は、天台宗との関わりが遅くとも12世紀前半までさかのぼることを物語っています。

常陸国南部の東城寺は、遠く離れた延暦寺と関わりをもちながら、その歴史を刻んできました。多くの古代寺院が姿を消してゆくなか、古代から中世という社会の変革期を乗り越えてきたのは、天台宗そして在地領主である常陸平氏と関係をもったことが大きく影響していると考えられます。

本堂の裏から案内標識に従って山道を少し登ると、経塚に行くことができます。新緑の美しい季節、東城寺と経塚を訪れてみてはいかがでしょうか。



（堀部 猛）

東城寺経塚群（茨城県指定史跡）

5/23（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも中世コーナーに展示）

- 東城寺経塚の出土品（複製）
- 伝東城寺経塚出土常滑壺（上高津貝塚ふるさと歴史の広場所蔵）
- 釈迦涅槃像（法雲寺所蔵）



ほうのうひやくしゅ
奉納百首

じょうい
— 攘夷への祈り

特別展「次の世を読みとく」では色川三中の人物と業績を紹介いたしました。記録することを自らに課し、家族や使用人にも求めた三中への理解を深めるため、日記や雑記、書状など大量の古文書や書籍を展示しました。しかし、充分紹介しきれなかった展示品があります。そのひとつがペリー来航直後にまとめられた和歌卷子「奉納百首」です。

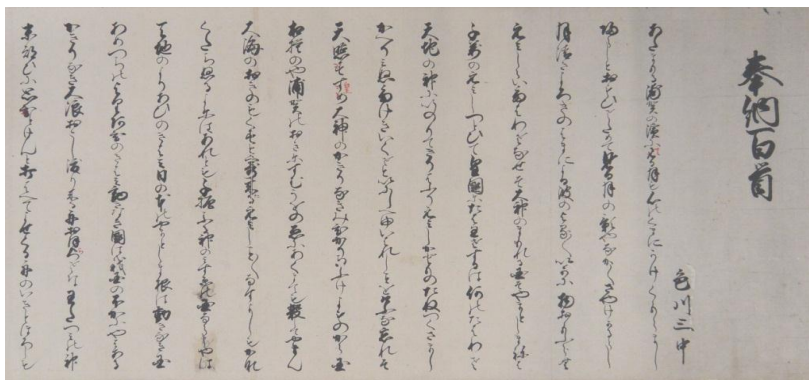
嘉永6（1853）年6月3日、アメリカ軍艦4艘を率いてペリーが浦賀に来航した情報がもたらされると、三中は11日の日記「辛亥」に、「天地の神二いのりてきりはふりえみしかとも種つくさまし（天地の神に祈りて切り屠り蝦夷がどもの種尽くさまし）」と和歌一首を書き付けました。「えみし」とアメリカ人を蔑称し、根絶やしにしたいとする激的な和歌です。

一首では飽きたらなかつたのでしょう。「兼ねてから詠んでおいた西戎調伏和歌100首に初穂金50疋を添えて大久保一学に持たせる」（嘉永6年6月26日「辛亥」）ことにしました。これが「奉納百首」です。一学は野爪村（現結城郡八千代町）の鹿島神社の神官の家に生まれ、三中の門人として色川家の川口蔵に寄宿して学んでいました。一学は翌27日早暁、「奉納百首」を携えて野爪村に旅立ちました。三中の手元に正本の控えが残されました。

「奉納百首」には先の和歌も含め三中が49首、府中（現石岡市）で醤油醸造を営む河田幸枝が33首、次いで三中の妻たけが7首、大町の医者五頭玄仲や一学らもそれぞれ攘夷を祈る和歌を寄せ、合計104首の和歌が書き留められています。

相模のや浦賀のおきにすむうを（魚）のゑ（餌）にあ（飽）くまでも殺してやまん 色川三中
と、三中は激しい和歌で憤りを表しました。

かきりあるみ（身）をも忘れてかきりなきことらほ（欲）りするわさ（業）のおろかさ 色川竹女
たけの和歌には本歌があります。三中が29歳で詠んだ「かきり有命をもちて限りなきことニ心を動すぞうき」（文政12年8月4日「家事志」）です。たけの和歌は勇ましくはありませんが、高ぶる三中にそっと寄り添っているようです。（木塚久仁子）



「奉納百首」（部分）当館所蔵

6/6（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 色川三中「家事志」
- 色川三中「和歌短冊」



すみぬ

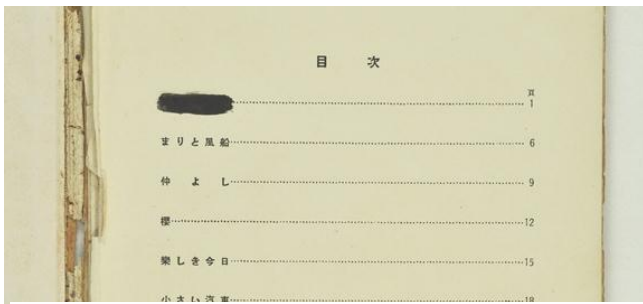
墨塗りされた楽譜

—戦時下の幼児教育の痕跡

昭和20(1945)年8月15日、多くの犠牲を払った太平洋戦争が終わりました。戦時体制の解除と新しい教育への転換という動きの中で、戦時下の書類は処分されたり、教科書は部分的に墨を塗って利用されたりと、教育現場は戦時体制からの脱却が急務とされ、混沌とした時代を迎えました。

戦後の状況について、土浦市立土浦幼稚園『創立百周年記念誌』の中で赤根春氏(元同園教員)は次のように記しています。「終戦処理となり、県からの通達に依り、各学校からの代表者が数人、来園して一寸でも軍国主義的な匂いのするものは全ぶ持ち出され、楽譜や書類等は全ぶ焼却されました。…(中略)…小使室脇の広場が焼却場となり、二階の職員室の窓から投げ落とされ、節句の人形まで火の中へ投げこまれ、書類が炎々と燃える炎の中に、次々と消えていく様は胸が迫る思いでした。…(後略)」。このような事情により同園の戦時下の書類はほとんど残りませんが、現在、墨塗りされた楽譜を3冊確認しています。

写真①の『^{りつどうゆうぎ}律動遊戯 第二巻』(昭和2年 土川五郎)は、目次が一ヶ所墨塗りされていますが「^{みくに}御国の



写真① 『^{りつどうゆうぎ}律動遊戯 第二巻』(部分)

誓れ」と判読できます。1～4頁の楽譜が破り取られていますが、5頁の解説の一部が残るため、この曲には子どもが国旗を持ってリズムカルに踊る振り付けがあったことがわかります。写真②『遊戯の歌と曲』(昭和7年 土川五郎)は、「ヘイタイ」のタイトル・楽譜・歌詞がまとめて墨塗りされています。また、『子供の為のピアノ小曲集』(年代不明)は「口兵行進」(口は判読できず)のタイトルと楽譜が墨塗りされていますが「H. Lichner」とあり、「^{わすれなぐさ}勿忘草」や「短いお話」などで知られるドイツの作曲家ハインリッヒ・リヒナー(1829～1898)の「^{かんべいしき}観兵式行進曲」と考えられます。物資不足の中にあって、軍国主義的な内容が比較的少ない教材は、墨塗りすることで残され、教員らがそれぞれ自制しながら活用したのかもしれませんが。



写真② 『遊戯の歌と曲』

(野田礼子)

(写真①・②とも土浦市立土浦幼稚園所蔵)

6/27(土) 11時・14時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)

- 土浦幼稚園開園の鐘
- 手作りおもちゃ(戦時下)
- 保育満了記念集合写真(戦時下)



市史編さんだより

色川三中の弟たち—色川美年・御蔭

「次の世を読みとく—色川三中と幕末の常総」展が終わりました。多くの皆様に見に来て頂き、たくさんのお声も伺うことができました。嬉しいことです。市史編さん係でもこの展覧会の準備のために、改めて資料を読む機会がありました。今しみじみと思うのは、色川三兄弟のことです。

色川三中（1801～1855）には美年（1814～1862）と御蔭（1815～1873）という二人の弟がいました。他に妹が二人います。長兄三中については早くから伝記も書かれていて、ある程度知られていましたが、美年と御蔭については、ほとんど知られていません。『家事志』全六巻を刊行した際、後半の三巻分は美年が執筆していますので、美年という人物についてもある程度は分かったつもりでいました。また日記以外にも和歌の草稿なども読みましたので、三中との感性の違いや和歌の詠風なども少しは知っていました。しかし、今回改めて他の文章も読んでみて、三中と同レベルの知識と学識を持っていたのだと知りました。御蔭についても同様です。三中一人が優れた学者だったのではなく、レベルの高い仲間の代表のような存在だったのだと思えるようになったのです。

また、偉人と呼ばれる人には陰でその人を支え、マイナスの部分を引き受けたり、励ましたりしてくれる人が傍らにすることが多いものです。三中の弟たちは兄の学問の一番の理解者だったでしょう。美年は経済的な面で色川家の本業である薬種商をしっかりと支えて、父祖の偉業を継ぐことを引き受け、御蔭は兄の死後も知のネットワークであった江戸や常総の学者たちとの交流を引き受けたのだと思います。

三人の中で、「次の世」（明治維新以降）を実際に見たのは御蔭だけですが、それも本当の次の世というにはまだ早い明治5（1873）年にこの世を去りました。新暦・円単位の通貨・戸籍・地租の制度などが実際に行われるようになったのは、御蔭の死後のことです。

現代は個人という単位が大切にされ、家や地縁のために個人が犠牲になることがないように、という考えが主流になっています。一人ひとりの人間にとって、それは望ましいことですが、兄弟の数が少なく、家族の結束などという縛りの薄れた現代では、色川家の兄弟たちのように、兄の志に弟たちが共感して陰になり日向になって生きた時代が、なつかしくさえ思われます。

商人としてはしたたかに、学者としては真摯に学問に心血を注いだ三中ですが、弟たちにはかけがえのない「お兄さん」だったのでしょう。

（市史編さん係嘱託職員 村松常子）

地域と博物館

博物館をつくる（3） ～どんな博物館をつくるのか②～

どんな博物館をつくるのかについて、前号で示した博物館の性格付けと学芸員の配置に、入館料の問題を加え、博物館の現状も見つめながらあらためてご紹介します。

博物館の建設準備が始まった頃、本市では、国指定史跡である縄文時代の上高津貝塚^{かみつかつかいづか}を史跡公園として整備し、そこに博物館施設を設置しようとする考えがありました。地域の特性を活かし、史跡と一体となった博物館活動という本市独自の理念と構想を掲げ、まずは江戸時代の城下町や土浦城址を擁する博物館を優先して、歴史（開館当初は考古も含めた）・民俗専門の博物館としてスタートすることになりました。その後、上記の理念と構想に沿って、平成2（1990）年から上高津貝塚の史跡整備が始まり、平成7（1995）年には史跡公園と併設する考古資料館（総称して「上高津貝塚ふるさと歴史の広場」）が考古専門の登録博物館として開館しています。

当館が開館した当時の「博物館法」では、公立博物館の設置運営に関する基準として、都道府県立の博物館には17人以上、市町村立には6人以上の学芸員（又は学芸員補）を置くとする規定がありました。理想的な博物館を目指すには、充実した博物館活動に必要な専門分野と人数を充足する学芸員配置が必須と考えました。開館時に配置できた学芸員は、考古1名、歴史2名（古代1、近世1）、民俗1名の計4名でした。基準の6名には及ばず、実質的にも中世や近現代など歴史系学芸員の更なる補充が課題となりました。博物館法に基づく学芸員数の基準は、全国的に博物館の学芸員数が低迷し現実とあまりにも乖離^{かいり}しているという理由から、残念ながら平成10年に廃止され、現状に即して、博物館の規模や活動状況に応じて学芸員数の増加に努めるという後退した内容に改正されています。

博物館法では、公立博物館は入館料その他博物館資料の利用に対する対価を徴収してはならないと規定しています。当館は入館料を105円（児童・生徒は50円）に設定しています。開館に当たっては、博物館法に則って無料の方針で検討していましたが、展示資料の保全や健全な施設管理を鑑み最低限の入館料を徴収し開館することとなりました。法が規定するとおり、公立博物館の利用の原則は図書館などと同様と考えられます。ただ、国立から市町村立に至るまで、全国のいわゆる公立博物館（独立行政法人も含む）の現状は、一定の入館料を徴収する博物館が一般的になっています。博物館法にある「維持運営のためにやむを得ない事情」を理由に、特別展などでは高額な入館料を設定する大規模博物館は多く、今、法の理念とはかけ離れた博物館が広く受け入れられています。

（塩谷 修）



上高津貝塚ふるさと歴史の広場
（上空より、右上が考古資料館）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、特別展「次の世を読みとく一色川三中と幕末の常総」の開催にちなみ、色川家の出自である紀州の色川村（現和歌山県那智勝浦町）で開催された色川姓サミットに参加された色川庸男さんに寄稿していただきました。

那智勝浦町での色川姓サミットに参加して

昨年3月に定年退職した私は、以前叔父から聞いていた色川姓のルーツといわれる和歌山の地を、機会があれば訪れてみたいと思っていました。その年の8月に、「色川を語り継ぐ会」から色川姓サミット開催の案内が届いたことをきっかけに、期待を胸に参加を決めました。サミットは、平成26年11月16日に開催され、私を含め25名の色川さんが集まりました。サミットの前日に行われた歓迎レセプションには、町長はじめ実行委員の田古良さんや地域の関係者の方々が出席され、マグロの一頭造りの実演などもあって、軽い気持ちで参加した私は、そのもてなしに感激を禁じえませんでした。

サミット当日は、マイクロバスで町立籠ふるさと塾へと向かうのですが、同乗した実行委員の浦さんからは、途中立ち寄った色川神社をはじめ地名の由来など、貴重な話を聞かせていただき、マイクロバスでの移動はとても有意義なものでした。会場の籠ふるさと塾には既に多くの地元の皆さんが集まっており、サミットに参加した色川さん方と共に、講師の田中弘倫氏による「色川の歴史・伝承と色川姓」の講演を聞いたのですが、地元の方々と共に話を聞いたことは、今回のサミットの大きな成果であろうと感じました。講演終了後は、会場の一角に展示された古文書や面などの貴重な文化財を拝見したのですが、これら文化財の年に一度の公開日がサミット当日ということで、今回のサミットの意義と共に歴史の重みというものを改めて感じました。午後も名所旧跡等を案内していただいたのですが、限られた時間の中地元の方ならではのコースや詳しい解説は大変分かり易く、今回のサミットに参加して良かったと実感したところです。

雑駁な印象を書かせていただきましたが、この場をお借りして、関係者の皆様にお礼申し上げます。

（土浦市役所都市整備部嘱託職員 色川庸男）



旧色川村をのぞむ

コラム(30) —城下町を歩こう—

博物館では、この春、江戸時代の土浦を代表する人物の一人である色川三中を特別展で取り上げました。博物館で展示をご覧いただくのに加え、三中の暮らした城下町土浦をぜひ歩いていただきたく、「色川三中史跡めぐりガイドマップ」を作成しました。このマップでは、現在の地図に江戸時代の堀や道路、土塁などを重ねて示していますので、江戸時代の土浦に思いを馳せながら歩くことができます。史跡を訪ね、その土地の風情に触れることも歴史の楽しみ方の一つです。暖かなこの時期、マップ片手に城下町の面影が残る土浦を散策してみたいかがでしょうか。想像力を豊かにすれば、見慣れた風景も少し違って見えるはずですよ。

※マップは1部50円で博物館で販売しています。

（堀部 猛）

情報ライブラリー更新状況

【2015・5・12現在の登録数】

古写真 542点(+5)
絵葉書 449点(+5)

※()内は2015年1月6日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2015年度

春季展示室だより（通巻第30号）

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～5ページのタイトルバック（背景）は、博物館2階庭園展示です。

次回夏季展示は、2015年7月1日（水）～9月27日（日）となります。「霞」2015年度夏季展示室だより（通巻第31号）は7月1日（水）発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます（カラー）